

工学国際教育の構想と理想と

大阪大学大学院工学研究科 応用化学専攻

大阪大学インターナショナルカレッジ 化学生物学複合メジャーコース 教授 関 修 平

「大阪大学を世界トップ10の大学にする」こんな見出しが、最近の大阪大学のホームページに踊っています。「世界大学ランキング」、英国 TIME 誌のもっとも有名なランキング¹⁾をはじめ、さまざまな分野でどこの大学の教育・研究のレベルが高いか、その順位付けを行い公表する試みがたくさん発表されています。私も、インターネットや各種メディアで「今年の日本の大学のランキングは～」といった報道がされると、またかとは思いつつ、そっと覗いてみたりしています。概ねどのランキングでも、工学分野では大阪大学は世界で50~100位の間に位置しているようで、10年ほど前よりは少し下がってしまったかなというところのようです。

大学の価値を決めるものとは一体何か、教育の質・人材の育成・研究のインパクト、新聞や雑誌でも何度も繰り返され、文字にするのは簡単ですが、はて、教育の質や人材の育成・研究のインパクトってなんなの？と疑問に思います。とても数値化するのが難しいこれらの項目は、しかし上記のランキングでは、比較的明確な統計値で定量的に議論されています。概ね、日本の大学のランキングの足を引っ張ってしまっているのは、国際教育分野における弱さだというのが共通した見解なのではないでしょうか。

2010年に第一期生を迎えた大阪大学化学生物学複合メジャーコースは、大変うれしいことに、まもなく2014年3月に最初の卒業生を輩出することになります。英語による講義・実験で学部教育を完結させるというこのコースの構築と運営にかかわってきて、ようやく卒業生を送り出すまでの道のりは決して平坦ではなく、運営の過程で生じたさまざまな問題点や解決法・解決できなかったことを語れと言われれば、1週間は話し続けられるくらいです。大学の中に小さな大学を創るとでも呼んだ方が良いでしょうか、入れ物はともかく、高等教育のソフトウェアをゼロから創るのはなかなか良い経験でした。これらの細かい内容は他稿に

譲るとして、この5年間で決定的な変化は何かと問われれば、「大学」というハードウェア・ソフトウェアを常に外から見る癖がついたことでしょう。

外から見た大阪大学はどのような大学か？いま自分たちはどこにいるのか？化学生物学複合メジャーコースに入学してきたわずか20名足らずではありますが、さまざまな国籍の学生たちの価値観に触れ、話し、そして彼らの進路についても考えていくうちに、あらためて自分が属する大学の立ち位置が見えてきました。大学をブランドと捉える向きは、日本の学生よりもむしろ、近隣アジア諸国の方が明らかに強いでしょう。国内でもかつて学歴偏重社会の問題点が叫ばれて、さまざまな大学教育に関するお仕着せの価値観がメディアから流される中、最近の報道の風潮を見ていると、高等教育をブランドと見て議論する向きは、大学の教員・学生よりもむしろ、外から眺めるメディアのほうがよく偏向し、流布しているように見えます。

我々のコースの属する学生たちの、正直な声はどうでしょうか？それぞれ母国から日本やアジア諸国・アメリカへと渡った同級生が多数いる中で、形成される価値観を生で聞くことができます。残念ながら、MITやCaltech・U Calに代表されるアメリカの著名な理工系大学に対して大阪大学のブランド力は半分以下といったところ。香港大学やシンガポール国立大学・中国の著名ないくつかの大学・ソウル大学などにも完敗というところでしょうか。とても残念なことですが、これが現実かも知れません。

そんななか、最近では日本の大学の、大阪大学の、そして工学部の魅力について改めて考えてみる機会が増えました。新しいコースをデザインするにあたっては、自分自身のこれまでの日本・海外における教育を受けてきた・行ってきた経験がまずはベースとなります。加えて、積極的に他大学、あるいは海外の大学の授業や学務システムを研究するようになりました。例えば、NHKで放送されている「白熱教室」という番組があ

ります。楽しみにされている方も多いのではないでしょうか？さまざまな感じ方があるでしょうが、私自身はシリーズで放映される白熱教室の講義のうち、自分の専門に近いものを改めてじっくりと聞いていて、世界の超一流と言われる大学の中でも超一流と言われる講義が、この程度なのかといつも安心してしまいます。テレビ向けということで過剰な演出ということもあるでしょうが、その講義の進め方と中身の薄さは、あらためて自分自身が日本の大学で受けてきた講義、また現在化学生物学複合メジャーコースの教員や自分自身が展開している講義と比較して、格段に優れているとは到底思えません。日本の大学の10倍以上の学費を必要とする大学の講義なのです。報道をされる方々は、本当に自分が大学で聞いてきた講義に比べて、圧倒的に素晴らしいと感じて番組を作っているのでしょうか。そうだとするならば今一度、自身の出身大学の講義を聞いてみると良いと思います。

残念ながら私には英語圏以外の大学の講義を解する力はありませんので、それ以外の地域の大学については、新しい知識を生み出す・創り出す面で見ていくことにしましょう。教育に比べ、知の分野・研究分野については比較的、統計計量分析が進んでいます。「知の重み」を数値化することにどれだけ意味があるのかわかりませんが、上述のさまざまなランキングを指標に大阪大学を見てみると、概ねアジアの中で10～20位程度といったところで、びっくりするくらい先ほどの学生たちの声による位置づけと似ています。これはもう、ランキングに支配されていると言ったほうが良いのかも知れません。私自身は化学の分野で研究をしていますので、特に日本が強いとも弱いとも言えない、ある意味で公平に見ることのできる分野ではないかと思っています。確かに私の関連分野で、中国の著名な大学から生み出される知の質の高さは実感できる部分が少ないありません。しかしそれは決して日本の他の研究者によって生み出されるものを凌駕しているとも思えない範囲です（近い将来凌駕する可能性はありますが）。ましてや、先に挙げた他のアジア圏の「高いブランド力」を持つとされる大学から生み出される研究に、敬意を払うべき内容が日本の大学のそれよりふんだんにあるとは到底思えませんし、今後10～20年のスパンで見ても逆転するような「予感」は全くないのです。

ではなぜ大阪大学の良さが広く認識されないの

でしょうか？これはこの5年間、ずっと疑問に思い続け、残念ながらいまだに明確な認識に至らないのですが、漠然と「教育というものに関する日本独特の認識」があるような気がしています。「大学は知の集積体」「新しい叡智を生み出す」という崇高な理念がある反面、「社会のために還元されるべき知」「利益を生み出す知」も求められるという側面があります。これらの考え方は、それぞれ完全には相容れないと思うもの。理学部と工学部とでも言ったほうが分かり易いかもしれません。大学と企業の構図にも置き換えられるでしょう。その結果、不必要な日本人特有の抑制が効いてしまう気がするのです。でも研究も教育も、そして利益を生み出す知や開発も、全てその過程は根本的には「楽しい」あるいは「面白い」はずです。「面白さ」だけを追求してはいけないという抑制があるのかもしれませんが。

日本では学生同士、または社会で「君はどこの大学で勉強したの？」と、第一声では絶対に聞きません。そうしないことを奥ゆかしさと思う文化があるからでしょう。テレビや新聞では結局最終的に学歴で「インテリ」を判断するものが多く存在するのを見てると、とても違和感を感じずにはられません。日本の大学の面白さを、そこで学んだ内容を、我々日本人はなぜ素直に伝えないのでしょか？きっとそれが、大阪大学の良さを伝えてゆく一番の近道であると思います。

大学の国際化は何のためか？留学生を積極的に受け入れ、大学の活力と財務基盤を確固たるものにすると同時に、日本の産業そのものへの直接的な人材供給にも応える、こんな説明はとてもわかり易いし、とても政治的な感じがします。化学生物学複合メジャーコースに受け入れた留学生は、1人で何10人かの日本人学生を、留学するほど深くはなくても、一定の意識変革をさせる効果を示すはずです。私自身がいろいろと考えさせられたように。「僕は、私は大阪大学(工学部)で学びました！」、そう素直に社会に、世界に伝える価値観を創ってくれることでしょう。今後も「大学の大学の」の運営には大きな紆余曲折があるとは思いますが、大阪大学の良さを正しく認識し、積極的に発信する、そういう役割を果たせる組織でもありたいと願っています。

1) <http://www.timeshighereducation.co.uk/>

(学界)